



2 健全な金融・資本市場を発展させ 次の世代につなげる

投資家が安心して参加できる金融・資本市場の構築のために

高い透明性・公平性を備えた信頼できる金融・資本市場の構築のために、私たちは高いコンプライアンス意識をもってのぞみます。また、本業を通して培ってきた経済・金融に関する経験や知識を、正しく次の世代につなげることによって、将来にわたって持続可能な金融・資本市場のさらなる発展を目指します。



大和証券グループのコンプライアンスの方向性

大和証券グループは、幅広い金融商品・サービスを取り扱う企業として、健全な利益を追求すると同時に、透明性・公平性を備えた健全な金融・資本市場を構築していくという使命と責任を担っています。つまり「投資家と発行体をつなぐ」あるいは「金融・資本市場に流動性を与える」という市場仲介者としての業務を通じ、社会資本・インフラとしての金融・資本市場を持続的に発展させる役割です。その役割を果たすために実効性の高いコンプライアンス、内部管理体制が求められます。そして、常にお客様の声を真摯に受け止め、「適合性の原則」を遵守した投資勧誘・営業活動を行うことが必要です。

リテール業務を担う大和証券では、2008年度に商品販売に関する諸ルールの全面見直しや、不公正取引監視体制を強化するための取引

審査部の新設など、証券会社としての使命を高い次元で果たせるような取組みを行ってきました。

今後も、従来にも増して営業部門とコンプライアンス部門が緊密な協力体制を築き、一体感をもって市場の担い手としての責務を全うし、常に社会からの要請にこたえられるよう取組みを強化していきます。

実効性の高いシステム体制の強化

大和証券の営業活動におけるコンプライアンスの推進や業務品質の向上には、高い意識をもった人材の育成、組織体制の整備と同時に、それらが有効に活用されるような高次元のシステム体制が必要となってきます。人為的なミスを未然に防ぎ、かつ業務の無駄を省くことにより業務品質を高め、コスト削減と業務効率化の両立、ひいては持続可能な金融・資本市場の発展に資することを目指しています。

帳票類の電子化の推進とともに、効率的なシステムインフラ基盤の確立の施策のひとつとして、シンクライアントの導入を着実に進めています。シンクライアントとは、パソコン端末にハードディスクを持たず、ワードやエクセル等のアプリケーションおよびすべてのデータをセンターサーバで集中管理するパソコンの新たな仕組みです。この目的は主に3つあります。

まず第一に、EUC(エンドユーザーコンピューティング)環境を集約化すること、つまり個人単位、部署単位でPCやサーバを所有するのではなく、部署間、グループ会社間でサーバを共有化(仮想化)することにより、システムの無駄を省くというもので、結果としてPCやサーバに使用する電力などの環境負荷の削減にもつながります。2つ目の目的はセキュリティの向上です。個々の端末には記録が残らないため、物理的に情報の外部漏えいリスクを軽減させることにつながります。そして3つ目の目的は事業の継続性への取組みです。基幹システムだけでなく、実際に業務を推進する各部署の、EUC環境自体の継続性を目指すものです。

現在、シンクライアント端末は本部部署への配置を完了し、全営業店への導入を検討しています。今後は営業店と本部、グループ会社間などの大和証券グループの業務体制の連携強化、効率化のための手段にとどまらず、関連会社・お客様など、金融・資本市場に関わる方々へのシンクライアントや電子ペーパーの導入なども視野に入れ、無駄がなくかつ強靱な金融・資本市場インフラの発展を目指します。

※詳細は、2009年8月末にウェブサイトにて公開予定です。

持続可能な社会に向けた教育活動

私たちは、経済・金融分野の知識や経験を次世代につたえるとともに、社会のサステナビリティ（持続可能性）への問題意識の共有を図るべく、教育・研究活動を積極的に支援しています。

ダイワJFS・青少年サステナビリティ・カレッジ

大和証券グループでは、『ダイワ・エコ・ファンド』の販売・運用によって得られた収益にもとづいた寄付をもとに、NPOのジャパン・フォー・サステナビリティ（JFS）とのパートナーシップによる学生向けの連続寄付講座を開催しています。

当講座は年間それぞれのテーマを定め、4年間でサステナビリティの全体像が把握できるプログラムとなっています。

毎月行われる講義では、大学教授、研究者、企業経営者、実務家、NPO/NGO、行政担当者など各分野の先端で活躍する方々が、サス

テナビリティに関連する考え方や実践を学生にわかりやすくつたえます。現在約250名の学生が登録し、大学の枠を超えた多くの仲間と学びあう場となっています。また、講義は英訳され、JFSのサイトを通じて世界191カ国・地域に発信されています。

講義後に行われる「サステナブルなお取り寄せ」紹介のコーナーでは、フェアトレード商品や、社会福祉施設でつくられたお菓子などの留意もあり、受講者の楽しみのひとつとなっています。

サステナビリティ・カレッジが提供する4年間のプログラム

1年目：容量・資源とサステナビリティ（2006年10月～2007年9月）
人間社会の営みはすべて、地球の限られた資源・容量のなかで行われることを認識し、「もったいない」という考え方で地球規模の問題をとらえます。
2年目：世代間・地域間の公平性とサステナビリティ（2007年10月～2008年9月）
私たちは、過去の世代の遺産を受け継ぎつつ、将来世代に受け渡していかなければなりません。国際間、地域間で、富や資源は公平に分配されているのでしょうか。だれもが搾取されることのない社会づくりを学びます。
3年目：多様性とサステナビリティ（2008年10月～2009年9月）
野生動物の生命の尊さや、人と人との間にある人種や文化など、さまざまな多様性を価値として尊重することを学びます。
4年目：意思・つながりとサステナビリティ（2009年10月～2010年9月）
よりよい社会を築くには、一人ひとりが思いをもって、他者とつながっていくことが必要です。豊かなつながりを生み出す、柔軟で開かれた対話のあり方、社会参加の意味とノウハウを学びます。

青少年への経済・金融教育

大和証券グループは、次代を担っていく青少年に対して、正しい経済・金融の知識を身につけて社会に参画してもらえるよう、本業を通して培った知識・経験をつたえるために産学連携や各種の経済教育プログラムを実施しています。大学における産学連携分野では、実務に即した寄付・協力講座にグループ役職員を派遣し、経済の基礎から最先端の金融ビジネスまで幅広い内容で実施しています。近年は特に東京大学、北京大学などを通じ、アジア各国との大学との横のつながりが出てきており、活発な意見交換が行われています。中学・高校生に対しては、お金や会社の仕組みについてわかりやすく学べるよう、青少年経済教育NPO「ジュニア・アチーブメント日本」が提供する「スチューデント・カンパニー・プログラム」や「ファイナンス・パーク」等の体験型経済学習プログラムに参画しています。また、学校教員や生徒の社会学習の一環としての企業研修では、実際のディーリング・ルームや本支店の見学など、当社グループ各部署のスタッフが協力して対応を行っています。

※詳細は、2009年8月末にウェブサイトにて公開予定です。



体験型経済学習「ファイナンス・パーク」の大和証券ブース

ポーター賞への協賛

大和証券グループは、日本経済の活性化に貢献することを目的として、金融・経済分野における産学連携を積極的に推進しています。その一環として、一橋大学大学院国際企業戦略研究科(ICS)が主催・運営する「ポーター賞」に、2001年度より協賛しています。

「ポーター賞」は、日本企業の競争力を向上させることを目的として、2001年にICSにより創設されました。賞の名称は、競争戦略論の第一人者であるマイケル・E・ポーター教授に由来するものです。

同賞では、独自性のある優れた戦略を実行し、高い収益性を達成・維持している日本企業を表彰して、その実践方法を広く世の中に知らしめ、競争戦略の理論と実践が日本企業に広く根づくことを目指しています。

2008年度は、12月4日にホテルオークラ(東京・港区)にて、同賞授賞式が開催されました。2001年の創設以来、26社が同賞を受賞しています。



マイケル・E・ポーター氏(右から2番目)と受賞企業の代表者

ポーター賞に寄せて

大和証券グループ本社 取締役会長 清田 瞭

大和証券グループでは、金融・資本市場を通じて、健全な社会・経済の発展に貢献するとの方針の下、主要業務である証券ビジネスに立脚したさまざまなCSR活動に取り組んでいます。

その一環として、大学や大学院との産学連携活動や青少年向けの金融教育プログラムの提供など、経済・金融教育の推進にも積極的に取り組んでいます。

「ポーター賞」については、日本経済の活性化に貢献することを目的としたICSとの産学連携にもとづき、2001年の同賞創設当初より協力しています。「ポーター賞」では、これまで独自の素晴らしい経営戦略を実践する多くの受賞企業を輩出してきましたが、私たちは、今後もそのような企業が一社でも多く現れることを願って、支援を行っていきたくと考えています。

持続可能な社会について問われる今日、金融・資本市場の担い手としての証券会社が果たす役割はますます重要なものとなってきています。大和証券グループでは、主要業務である証券ビジネスを通じて、社会・経済の健全な発展のために尽くしていきます。



マイケル・E・ポーター氏と